比較内分泌学若手研究者交流会

「企業・大学・そして世界へ～若手研究者の未来と意見交換会」

本会の主旨

大学院生や若手研究者の皆さんは、どのように研究と向き合い、ご自分の将来を考えているでしょうか。

この交流会では、比較内分泌学の分野からそれぞれ異なる道へ進まれた演者をお招きし、学生時代の興味と進路選択のきっかけ、現在の研究について話していただきます。また、講演後には意見交換会として、参加者同士で自由に話していただく場を設けます。

他大学・研究室および大学院生・学部生の皆さま、ふるってご参加ください。

日　時：平成 23 年 11 月 22 日（火）18:00～20:30
会　場：東京大学理学部 2 号館講堂
オーガナイザー：日下部誠（東京大学）、今野紀文（富山大学）、御輿真穂（岡山大学）
参加費：無料（当日ご自由にご参加ください）

プログラム

18:30～	1. はじめに	今野紀文（富山大学）
18:40～	2. 企業の研究員というお仕事	仲忠臣（日本水産株式会社）
19:10～	3. ゲノムが拓く新しい比較内分泌学	石川麻乃（国立遺伝学研究所）
19:40～	4. 比較内分泌学と研究留学－海外に行くには？何ができる？その後は？	日下部誠（東京大学）
20:10～	5. 意見交換会と総括	御輿真穂（岡山大学）

交流会後に懇親会を予定しています。お気軽にご参加ください

東京大学本郷キャンパス理学部２号館へのアクセス
http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_06_02_j.html

＜講演内容＞

企業の研究員というお仕事
仲 忠臣（日本水産株式会社中央研究所）

私たちの研究所では、水産食品、養殖、機能性素材の研究開発を行っています。私の現在の研究内容は、限りある水産資源を余すことなく有効に利用するために、加工の過程で発生する副産物（カニの殻、魚の内臓、エラなど）から、機能性素材を取り出して新たな価値を付加する、というものです。ラボでの基礎研究のステージから、工場での事業化のステージまでを、他部署と調製しながら自分の手で行うことができる点は、大学での研究とは大きく異なっているのではないでしょうか。学生時代の専門と一致した研究に携わっている研究員がほとんどですが、中にはまったく異なるバックグラウンドを持った人もいて、多角的なディスカッションをしながら仕事を進めています。専門性にとらわれない、スケールの大きな仕事をしたいという学生さんは、企業の研究員というお仕事を選んでみてはいかがでしょうか。

ゲノムが拓く新しい比較内分泌学
石川麻乃（国立遺伝学研究所）

アカデミックの道に進んでから、「やりたいことにまっすぐ向かっているんだね」「迷いがないんですね」と友人や後輩に言われる。確かに、私も学部生や修士の時には先輩方を見てそう思ったものだが、実際、悩みは大有りで、自分がアカデミックの道に進むと決意した時にも大いに迷い、今でも確固たる自信があってこの道を進んでいるわけではない。と言っても、ずっと迷ってばかりでは埒があかないので、正しいタイミングで悩み、踏ん切りをつけることが大事だと思っている。本講演では、私が学部・大学院で取り組んできたアブラムシの表現型可塑性に関わる研究、修士での就職活動、ポスドク先の検索、トゲウオ研究への移行などを踏まえて、研究者の卵である私たちにとって、実りある将来の悩み方と踏ん切りのつけ方について考えたい。

比較内分泌学と研究留学ー海外に行くには？何ができる？その後は？
日下部 誠（東京大学大気海洋研究所）

子供の頃からとにかく海外の学校に通ってみたいと思っていました。大学を卒業する時、大学院が学生として「学校」に通える最後のチャンスと思い、留学を決意。留学したニュージーランドのオタゴ大学動物学科の修士と博士課程では、魚類の精子形成に関わるステロイドホルモンの産生メカニズムについて研究しました。大学院では研究で得られた結果をいかに第三者に伝えるかというコミュニケーションに重点をおいたプログラムが組まれていたのがとても印象的でした。海外の大学には世界各国からの留学生や研究者も多く、みんなの考え方や好みが十人十色です。自分と違うものを受け入れる力がないと続かないことを実感しました。それが今では大きな財産になっています。ぜひ皆さんにも海外での「違い」を感じる経験をしてほしいと思います。